

大久保良峻著

『最澄の思想と天台密教』

(法蔵館・二〇一五年)

道元 徹心

一

著者である大久保氏は既に『天台教学と本覚思想』（法蔵館、一九九八年）及び『台密教学の研究』（法蔵館、二〇〇四年）を刊行しており、それ以降に著者が発表された論文の中から最澄を根幹に系統立て構成された論考が本書である。本書は著者の専門領域である天台学・密教学を中心に、従来の研究において未解明であった日本天台の諸問題に取り組んだ専門書となっている。

日本天台は『法華経』の教理を中心に法華円教・密教・禪・戒の四宗を融合した教えが特徴で、そこに口伝法門（天台本覚思想）や浄土教の内容が交錯し融会してきたことも日本天台の特色として挙げられる。

本書の書名の一部ともなっている「天台密教」（台密）は『大日経義釈』がその根本にある。天台教学と密教の一致を円密一致として最澄が説き、それが台密また日本天台の特質となってきた。最澄の思想には後の台密教学に通底する基盤があり、最澄に対して多くの先行研究があるものの空海のそれに比べるゝと研究は遥かに遅れていると大久保氏は本書のまえがきで指摘する。そのような状況のもと、本書は著者の前著である二書を踏まえ、最澄にはじまる日本天台の課題に対し新たに精緻な分析を發揮したものに仕上がっている。

また本書は法華円教の成仏論について、中国天台から日本天台の証真に至るまでを中心に教学展開を論考している。日本天台での成仏論は即身成仏を説いており、法華円教としての即身成仏論は、最澄晩年の著『法華秀句』巻下「即身成仏化導勝八」に始まる。最澄が「即身成仏」の語を提示したことが後継者への課題と指針を示しているという。

二

まずはじめに本書の構成を以下のように示す。

I 最澄の思想概説

最澄と天台密教

- 一 はじめに／二 最澄の密教学／三 天台教学と密教学／四 徳一との論争と密教／五 まとめ

日本天台創成期の仏教——最澄と円仁を中心に

一 最澄と円仁／二 修行の階梯について／三 現実肯定の思想／四 その他の問題

II 最澄の思想——その源流と新基軸

天台教学における龍女成仏

一 はじめに／二 『法華経』 提婆達多品の龍女成仏／三 『法華文句』と『法華文句記』の解釈／四 日本天台における解釈／五 結語

最澄の教学における成仏と直道

一 成仏論の問題点／二 大直道思想について／三 『註無量義経』について／四 結語

最澄の成仏思想

一 宗祖としての教学的特色／二 最澄の成仏思想の帰結／三 徳一との論争と密教義／四 行位の問題／五 結語

最澄と徳一の行位対論——最澄説を中心に

一 行位論鳥瞰／二 初発心について／三 通経の十地について／四 結語

名別義通の基本的問題

一 問題の所在と基本説の確認／二 名別義通の諸様相／三 小結

最澄の経体論——徳一との論争を中心に

一 はじめに／二 天台経体に対する徳一と最澄の議論／三 徳一の経体説への論難をめぐって／四 その他の問題点

五 結語

III 天台密教の特色と展開
安然と最澄

一 問題の所在／二 最澄の著作と安然／三 法相宗に関連して／四 結語

天台密教の顕密説

一 顕教と密教／二 秘密教としての『法華経』／三 密教と秘密不定教／四 顕教と円教／五 結語

一念成仏について

一 一念とは／二 一念と時間／三 成仏と一念／四 『五部血脈』「一念成仏義」について／五 結語

発心即到と自心仏

一 心と成仏／二 発心即到／三 自心仏／四 結語

東密における十界論

一 はじめに／二 東密の基本文献に見る十界／三 『声字実相義』の註釈をめぐって／四 安然と東密義／五 結語

『大日経疏指心鈔』と台密

一 台密と東密／二 『大日経疏指心鈔』における空海説の展開／三 即身成仏思想に関する若干の問題／四 『大日経疏指心鈔』の意義——結びに代えて

台密諸流の形成

一 はじめに／二 最澄の密教／三 『四度授法日記』に見られる諸流／四 台密十三流について——結語に代えて

IV 訳註 円仁撰『金剛頂経疏』大綱・玄義

はじめに／金剛頂大教王経疏卷第一

あとがき

本書は四部構成からなり、第一部は著者の講演録が二つ収載され、後の専門の論考を理解する上で大変分かり易い導入となっており、工夫した配慮がなされている。続く第二部は最澄に関する論文から構成される。そして第三部では前著『台密教学の研究』以降の密教関係の論考が収載されている。最後の第四部は円仁の『金剛頂経疏』の冒頭部である玄義の箇所について、本書書き下ろしの訳註研究が収められた。そこに台密の基盤が凝縮されている理由からとされる。

三

次に、評者としてさらに詳しく第二部から本書の特徴的内容を紹介していく。

最澄の成仏思想の特色は即身成仏を論じたところにあつて、それは晩年の『法華秀句』にみられる。しかし、著者は最澄がそこで即身成仏論を展開するには十分ではなく、後世へ継承される思想展開としての基盤作りにあつたと語る（四七頁）。

『法華経』提婆達多品に説かれる龍女の成仏に関する記述は、天台教学において即身成仏の観点から注目されてきた。本書では龍女成仏について中国天台の教学にさかのぼって説明を試みており、それがやがて日本天台において如何に思想展開するか

を明解に論じている。

釈尊の面前で智積菩薩と龍宮で『法華経』を説いてきた文殊菩薩との対談がある。智積の問に対し文殊が次のように答える。娑竭羅龍女の八歳になる娘（龍女）が刹那に菩提心を発して不退転を得た。それを受け智積は、釈尊ですら無量劫の難行苦行をされたのに女人が須臾にして正覚を成じるなど、と返答するやいなや、忽ち龍女が現れて仏を讃嘆する偈頌を説く。そして龍女が仏に宝珠を奉るが、その宝珠を仏が受け取る動作よりも疾く龍女は男子に變じて菩薩行を修し、南方の無垢世界で成仏するのである。そこで衆生のために妙法を説き、集つた一切の者たちは大いなる功德の『法華経』を信受していく。この説示より日本天台の学匠とりわけ最澄・円仁・円珍・安然などによって龍女成仏に対する見解が示され、即身成仏や速疾成仏を論じる上での典拠となつてきた。

智頭の『法華文句』によると、女人が今の体を捨てたり、新たな体を受けたりすることなく、現身成仏することを説く。また本書ではさらに湛然の『法華文句記』を取り挙げ教義上の問題点を検討している（三九〜四一頁）。分段身の捨・不捨の問題があり、これは日本天台で即身成仏の考察上大きな問題となる。無生法忍を得ると生身（分段身）を捨てて法身を得るのが天台学の基本であるが、円仁・憐昭・安然が分段身の不捨を主張して独自の見解を示すと大久保氏は指摘する。またこの問題検討は『天台教学と本覚思想』（一〇三〜一五六頁）においても「即

身成仏論の展開」として円仁の即身成仏論の捨・不捨に焦点をあてて論考し、四種の『即身成仏義』を紹介して考究している。

生身を捨てて法身を得る義と生身を捨てずに生身のままでいる生身得忍の二義の問題が存する。龍女の権巧は、生身を捨てて法身を得た龍女が実報無障礙土から来て南方無垢世界で示したことで、龍女がどこで法身を得たか明瞭でない久保氏は指摘する。龍女が実者か権者か、そして権巧・実得ということが複雑に絡まって展開する。実得とは無生法忍を得ても生身のまま、生身得忍の義とされる。

最澄以来、日本天台の成仏論は即身成仏の法門である。それは龍女成仏論とも言われその思想も一様でなく、龍女の成仏を様々な観点から論究し即身成仏の理論構築と課題を明示したものが本書である。

中国天台における龍女成仏の問題に十分な分析をなしたのが証真とされる。本書では彼の『法華疏秘記』を検討し、捨・不捨の問題で智顛や湛然の解釈から展開して、証真が「生身のままに成仏するという実得の義」の解釈を指摘している(四三頁)。さらに証真とは異なる観点から龍女成仏を考察したものであるとして聖覚の『例講問答書合』の教説を検証している。そこでは龍女を新聖か旧聖か、新聖の権(権巧)・実(実得)の二義に注目する。

本書において龍女成仏の問題について、無生法忍を得ることを如何に理解するかが重要で、それを積極的に論じるのが円仁

であり、生身の不捨として論じる憐昭の『天台法華宗即身成仏義』や安然の『即身成仏義私記』の根幹になっていき、安然の密教義による即身成仏論の立脚点になったと論じている(四七頁)。円仁は無生法忍を得て生身を捨てるのは転捨であり生身のまま法身に転じている意味である。生身得忍と無生法忍を得て生身を捨てる二義と立場が異なる。

また著者は東密においても空海説を完成形態と見ず、台東密の即身成仏思想は多彩な展開をなしており台東の安然に至っては空海説の導入とその後の相互影響に本書は着眼している。

続いて本書では最澄の教学について成仏思想を論究する。龍女の身体の問題は無生法忍を得た時に生身の体を捨てて法性身(変易身)を得るのが教説として基本であり、それは天台教学において初住位にあたり龍女成仏の位ともなる。それは行位論に関連してくる問題である。最澄の特質として、天台法華宗の優越性を示すのに大直道思想を挙げ神通乗を強調した点を久保氏は提示する。最澄は三生成仏までを即身成仏と捉え、『守護国界章』の説示より華嚴の信滿成仏(十信の満位)と天台の初住成仏(天台円教で生身の分段身を捨て、法身を得る位)を同じとする最澄の立場を本書で紹介する。

さらに本書では、最澄と徳一との二乗作仏や行位の論争にもふれ、龍女成仏の問題で行位に論を進めている。この行位論は中国天台と日本天台で「名別義通」として論じられた問題である。徳一は通教(共)の十地と別教(不共)の十地が配当され

ることに基づき、その同一性を其の十地を中心に説き、最澄は通教と別教の十地の違いを力説することで天台教判の正当性を論じる(一〇九頁)。天台の典籍を用いて証真に至る「名別義通」の諸様相を明かしている。

四

本書の第三部は天台密教の特色と展開について詳細に分析している。台密を大成するのは安然であるが、安然の基盤となつたのが円仁の業績であり、両者の前には最澄が重んじた教義がある。それは真如随縁論や経体論であり、安然では眼前の諸法をそのまま法身の活動と捉え台密の法身説法思想へ展開する。

このような教理は、中国天台から最澄を経て継承されている重要性を大久保氏は指摘する(一五六―一五七頁)。また神通乘において最澄から安然に継承されている。この神通乘については、大久保氏が『台密教学の研究』(第十四章 神通乘について)で詳しく分析している。

智顛の時には密教はなかったが、智顛の教義を活用したのが台密教学であり、その先蹤が『大日経義釈』に求められるとする。秘密の語には「奥深い」という意味があり(一七〇頁)、真言密教における秘密をどのように考えるか課題である。大久保氏は安然の『教時間答』と『菩提心義抄』によって円密一致を基本としてその問題にあたっている。そして頭教と密教を如何に理解するか問題点を提示しつつ論じていく。

仏教の本来的眼目が成仏にあることは言うまでもない。その成仏するのに長い時間を要すると説くのが歴劫成仏で、それに対するものとして速疾成仏と即身成仏が説かれてきた。即身成仏と同時に論じられる速疾成仏も一生という期限を前提とする場合や瞬間を意味する場合がある。この時間論を問題として、究極的に対比するものが歴劫と一念や一刹那である。本書ではこの一念成仏に踏み込んだ論考をしており、次にそれを紹介する(二八一―一九九頁)。

本覚思想文献で『伝教大師全集』に「一念成仏義」の項があり、天台小部集釈に最澄述と収まる「一念成仏義」と同内容である。また本覚思想文献に『三十四箇事書』があり、そこにも「一念成仏事」として掲げられ名字即成仏をうたっている。ここで時間としての一念と、一念三千の一念との両方の義を示しつつ、一念を時間と捉えた検討をしている。『法華文句記』によると一念はただ時間的な一念を経過するということだけでなく、一心の法を指す解釈も紹介している。

成仏の遅速をふまえその速疾性を自宗の義として誇示したのが平安初期仏教であり、それが日本天台や東密の教義特色と指摘する(一八六頁)。この速疾性を強調して論じたのが『大智度論』巻三八の記述で、そこには神通の比喩を説いており、この比喩が密教に導入される。また仁空の『義釈搜決抄』に一念成仏の語を見出し、仁空の成仏思想が本覚思想に近いもの指摘する。つまり成仏は凡夫の当体のままの即身成仏を意味する

が、もともと仏であると解する思想である。六即の理即・本来成仏・理具成仏という概念が基底にあり、それに眼目を置いた成仏論であると論じている。そして最澄撰と伝わる「一念成仏義」を引用する貞舜の『宗要柏原案立』を検討すると、そこでは一生妙覚を説くことを指摘する。時間論と行位が交差するわけで、妙覚位を一生成仏の果としうる旨を語っている。ここでの結語として大久保氏は、即身成仏や速疾成仏は一生という期限を前提とする場合や瞬間を意味する場合があると論じる。一刹那に無量劫を具するとしても、初住や妙覚に入るにはその位に至るまでの漸次の階梯をどのように理解すべきか問題提起する。

行位論と即身成仏との関係は、大久保氏が『台密教学の研究』（第八章 台東両密における行位論の交渉）で詳しく検討している。

本書では心と仏との関わりを「発心即到と自心仏」として明かしていく。このテーマは東密の論題として知られ、『華嚴経』の「初発心時便成正覚」であり『涅槃経』の「発心・畢竟二別」とも共通の概念と示す（二〇二頁）。空海の『般若心経秘鍵』を挙げ、真如が身外にあるのではなく、自らの心・身を尊重する記述に繋げ、迷悟が我にあることを根拠として「発心即到」と示されている点を指摘する。「発心即到」の用語は安然の『菩提心義抄』にも見られるという。また自心と仏、あるいは成仏の関連で『大日経義釈』を挙げ、そもそも『大日経』が

自心を尊重し、菩提を「如実知自心」と説明することを指摘する。自心仏に関係する用語は最澄の『守護国界章』や空海の『十住心論』に記述されている。これが安然の『教時問答』で重視され、密教を「遍一切乗・自心成仏之教」と安然が押さえており、自心成仏について自心仏を成ずることと安然説を特記する。このように心の成仏があつてこそ即身成仏が可能となり、特に日本天台では『大日経義釈』を縦横に用いて即身成仏論を展開させた大久保氏は結ぶ。この論考過程で明曠撰『般若心経疏』を親撰として空海に言及する現今の見解を否定するのである。

また東密の教学は空海の教えを展開させ、同時に台密の影響も見逃せない。本書では台東両密の関わりを考究する上から、注目すべき記述の多い頼瑠の『大日経疏指心鈔』を検討している。ここでは空海で不明瞭であった行位論を頼瑠によって明かし、日本天台との関連にも言及する（二二七―二四三頁）。

最後に台密諸流の形成について究明し、第四部で円仁撰『金剛頂経疏』の訳註研究を掲げている。この疏の大綱と五重玄義には、台密の根幹となる教義が凝縮して豊富に示され、五重玄義が天台教学そのものでもあり、円密一致を主軸とする台密の特色が発揮されている（二六六頁）。大久保氏は先行研究の訓読や解釈を修正しながら訳註研究として掲げ大きな成果をあげている。

円仁の業績はやがて安然によって大成されるが、著者には既

に安然に関する多くの論文があるので、安然の教学についての
公刊が待ち望まれる。

(龍谷大学教授)

末木恭彦著

『徂徠と崑崙』

(春風社・二〇一六年)

山本 嘉孝

一 本書の特色と構成

本書は、近世日本を代表する儒者の一人である荻生徂徠とその門人の山井崑崙について、著者が一九八二～九二年の十年間に発表した論文九篇を合計八章に収める。特に大幅な修正・加筆はない。本書の出版は「偶然」(あとがき)であったとのことだが、初出論文がこのような形で一冊にまとめられた意義は大きい。本書の最大の特長は、敢えて抽象的な言い方をすれば、全てを徂徠の色で染めてしまわない徂徠学研究となっている点である。

著者は意識的に、徂徠の経書読解を朱子学摂取の過程として捉えなおしている。これは、徂徠の時代から現在に至るまで、徂徠の学問が専ら朱子学の否定としてばかり取り沙汰されてきていることに対する疑念に基づいており、大変貴重な視点である。また崑崙については、徂徠学の単なる継承者として見做すのではなく、自身の意志と判断によって「古」への接近を企